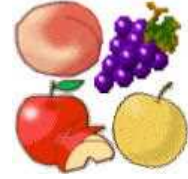




平成29年度 果樹情報 第10号

(平成29年8月 4日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況（7月後半：果樹研究所）

平均気温は、平年と比較すると4半旬が25.4℃で1.8℃高く、5半旬が26.3℃で1.9℃高く、6半旬が24.4℃で1.0℃低く経過しています。

この期間の降水量は138.5mmで平年の220%でした。

2 生育状況（8月1日時点：果樹研究所）

(1) もも

ア 果実肥大

暦日比較では、「あかつき」は縦径102%、側径104%と平年並で、「ゆうぞら」は縦径110%、側径116%と平年より大きい状況です。満開後日数による比較でも、「あかつき」は平年並で、「ゆうぞら」は平年より大きい状況です。

イ 早生～中生品種の収穫期と果実品質

「暁星」の収穫盛期は7月22日で平年より5日早まりました。果実の大きさは221gと平年並で、RM示度（糖度）は14.0と平年より高くなっています。

「あかつき」の収穫始期は7月31日で平年より2日早まりました。収穫始期における果実の大きさは289gと平年並で、RM示度は13.8と平年より高くなっています。

表1 もも早生～中生品種の収穫状況と果実品質

品種	収穫始(月/日)			収穫盛(月/日)			収穫終(月/日)			平均果重(g)			RM示度		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
はつひめ	7/ 7	7/ 8	6/30	7/11	7/11	7/ 4	7/13	7/15	7/ 7	273	261	263	13.1	11.3	10.0
日川白鳳	7/10	7/16	7/ 7	7/11	7/19	7/11	7/13	7/22	7/15	249	230	248	12.6	10.7	10.6
暁星	7/18	7/23	7/15	7/22	7/27	7/18	7/28	7/31	7/22	221	215	214	14.0	12.7	12.6
ふくあかり	7/21	7/24	7/15	7/25	7/30	7/19	7/31	8/ 3	7/22	284	259	239	13.9	12.8	11.5
あかつき	7/31	8/ 2	7/21	未	8/ 5	7/24	未	8/10	7/28	未	265	257	未	12.6	13.0

※ 未は未確定

(2) なし

ア 果実肥大

暦日比較では、「幸水」は縦径108%、横径109%と平年よりやや大きく、「豊水」は縦径112%、横径114%と平年より大きい状況です。満開後日数による比較でも、両品種ともに平年より大きい状況です。

イ 「幸水」の裂果発生状況

「幸水」の裂果発生率は0.6%（平年3.7%）で、平年より低くなっています（平年値：1990～2016年の平均）。

ウ 「幸水」の収穫期予測

7月31日現在、DVRモデルによる「幸水」の収穫予測では、収穫盛期は平年より2日早い8月29日と予想されています。

表2 「幸水」の収穫盛期予測

本年	平年	昨年
8月29日	8月31日	8月22日

(3) りんご

ア 果実肥大

暦日比較では、「つがる」は縦径106%、横径107%で平年よりやや大きく、「ふじ」は縦径100%、横径103%と平年並の状況です。満開後日数による比較でも、「つがる」は平年よりやや大きく、「ふじ」は平年並の状況です。

イ 「つがる」の成熟状況

満開後87日（7月27日）における「つがる」の果実品質は、果肉硬度が16.9ポンド、デンプン指数は1.1、RM示度（糖度）は11.0、リンゴ酸は0.40%となっています。

生育日数で比較すると、果肉硬度及びデンプン指数は平年並に推移し、クロロフィル含量は多くなっています。

(4) ぶどう

ア 「巨峰」の成熟状況

無核栽培における満開後51日（7月28日）の成熟状況は、RM示度（糖度）13.0、酒石酸含量1.50となっています。

イ 「あづましずく」の成熟状況

満開後53日（7月28日）の成熟状況（長梢栽培）は、RM示度15.5、酒石酸含量0.86、果実カラーチャート値7.5となっています。

気象庁[営農活動に役立つ気象情報] <http://www.jma.go.jp/jma/kishou/nougyou/nougyou.html>

3 栽培上の留意点

(1) 共通

6月の降水量が51.0mm（平年比42%）と少なかったものの、7月4～6半旬の降水量は138.5mm（平年比220%）とかなり多く、研究所内では土壌が過湿状態にあります。今後、台風が発生しやすい時期を迎えるため、園内に停滞水が見られる場合には明きよなどにより排水に努めましょう。

また、乾燥が続く場合には、以下の対策により土壌水分の管理に努めましょう。

ア かん水

盛夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度ですので、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くします。

ただし、ももでは収穫5～7日前以降のかん水は、糖度など品質の低下につながりやすいので、かん水が必要な場合は早めに実施しましょう。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合、草刈りをしない場合の約半分とされます）。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(2) もも

ア 中生種の収穫

研究所内の「あかつき」の収穫始期は平年より2日早まりました。研究所内では、核の縫合面の裂開は発生が少ないものの、核頂部の亀裂の発生は例年よりもやや多くなっています。「あかつき」の収穫期に入り、核障害による早熟果（地色の抜けが早い果実）が散

見されていますので、果肉の軟化に注意し収穫が遅れないように留意しましょう。また、今後収穫される「まどか」等の品種においても熟度に注意を払いながら、品種の成熟特性に応じた適期収穫に努めましょう。

イ 晩生種の収穫前管理

中生種の収穫時期から推定すると、晩生種の収穫期も平年より早まることが予想されます。今後、「川中島白桃」「ゆうぞら」等については果実肥大が盛んな時期に入るので、適期に修正摘果を実施するとともに、夏季せん定や支柱立て、枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理を計画的に実施しましょう。また、有袋栽培では、今後の天候が曇天となる場合に除袋の遅れにより着色不良となることがあるため、着色管理作業も計画的に行いましょう。

(3) な し

ア 修正摘果

「幸水」の裂果期は終了したので、早急に修正摘果を実施しましょう。裂果した果実、変形程度の著しい果実、果点コルク間の地色が白い果実（肥大が停滞しやすい）及び満開後100日（8月4日）頃の横径が60mm未満の小さな果実を摘果します。過度の摘果は収量に影響するので注意しましょう。

(4) りんご

ア 落果防止剤の散布

「つがる」の落果防止剤としてストップール液剤を用いる場合には、収穫開始予定日の25日前に散布しましょう。

イ 早生種の収穫前管理

「つがる」や「さんさ」では果面の30%程度が着色した頃から葉摘みを開始します。日焼け果の発生が懸念される場合は、直射日光の当たりにくい部位から始め、徐々に作業を進めましょう。地色の緑色が強い時期に早めに葉摘みを行うと、日焼け果の発生を助長するので注意しましょう。

ウ 修正摘果

中晩生品種は、果実の大きさ、果形、サビ、日焼けの有無等をよく見て修正摘果を行いましょう。

(5) ぶどう

ア 摘心（長梢栽培）

一定の葉数が確保された8月以降の摘心は、果実品質の向上と新梢の充実が期待できます。8月上旬以降も伸長が続いている強い新梢は、20～25葉程度を目安にそれより先を摘心しますが、摘心後も棚下が暗い場合は、新梢の間引きを行いましょう。この際、間引く本数は必要最小限にとどめます。また、副梢の摘心も同時に行いましょう。摘心および停止した新梢から発生した勢力の強い副梢は、基部の2～3葉を残して摘心します。

4 病害虫防除上の留意点

(1) 病 害

ア りんご褐斑病、輪紋病、炭疽病

これらの病害の発生が懸念される園地では、これらに効果がある薬剤を十分量散布しましょう。なお、炭疽病の発生を抑制するために、園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物を除去しましょう。

イ りんご黒星病

7月下旬における中通りでの発生ほ場割合は平年並でしたが、会津では平年よりやや高い状況にあります（7月28日付け平成29年度病害虫発生予察情報・発生予報第5号）。

本病の発生が見られる園においては、薬剤散布の間隔があきすぎないように注意しましょう。また、発病部位は伝染源となるため適切に処分しましょう。

ウ もも灰星病、ホモプシス腐敗病

灰星病については天候の推移に注意しながら、灰星病防除剤を使用しましょう。なお、薬剤の使用にあたっては農薬使用基準（収穫前日数、使用回数）に十分注意しましょう。

晩生種に対してはホモプシス腐敗病にも効果のある薬剤を選択し、十分量散布しましょう。

エ なし黒星病

7月下旬における浜通りでの発生ほ場割合は平年よりやや低く、中通り南部で平年並ですが、中通り北部では平年よりやや高い状況にあります（7月21日付け平成29年度病害虫防除情報）。「幸水」では8月上旬頃までに感染した果実が収穫期に発病するおそれがあるため注意が必要です。

本病の発生が見られる園において、散布間隔が前回の散布から10日程度あいている場合は、ただちに黒星病に効果のある薬剤を十分量散布しましょう。なお、薬剤の使用にあたっては農薬使用基準（収穫前日数、使用回数）に十分注意しましょう。

(2) 虫 害

ア モモハモグリガ

モモハモグリガ第4世代成虫の発生盛期は8月3半旬頃であると予想され、第5世代幼虫の防除適期は8月3～4半旬頃と推定されます。本種の発生には、防除が十分でない花もも園や放任園などが影響していると考えられるので、防除や伐採などの対策を実施しましょう。

イ ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第3世代成虫の発生盛期は8月4半旬頃と予想され、第4世代幼虫の防除適期は8月5～6半旬頃と推定されます。本種の第3世代以降は、なし果実への寄生が増加し、また、中生種以降のももで果実被害が発生する場合がありますため、例年、なしやももでの果実被害が多い場合やももの芯折れが多い地域では、第3世代以降に対して必ず防除を実施しましょう。

ウ カメムシ類

新成虫が発生する時期となっており、山間及び山沿いの果樹園ではカメムシ類の被害を受けやすいので、飛び込みをよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行いましょう。

エ カイガラムシ類

例年の場合、ウメシロカイガラムシ第2世代幼虫の防除適期は8月上～中旬頃、クワコナカイガラムシ第2世代幼虫の防除適期は9月中～下旬頃です。カメムシ類対策等で合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤等を多く使用している園地では、天敵類の減少によるカイガラムシ類の増加に注意しましょう。

オ ハダニ類

高温乾燥条件が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭）の密度になったら速やかに防除を行いましょう。

表3 主要チョウ目害虫の防除時期の推定
(果樹研究所 平成29年8月1日現在)

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ	
	第4世代 成虫盛期	第5世代 防除適期	第3世代 成虫盛期	第4世代 防除適期
2℃高い	8月12日	8月15日	8月16日	8月22日
平年並	8月12日	8月15日	8月18日	8月25日
2℃低い	8月13日	8月17日	8月20日	8月29日

注) 演算方法は三角法による。

起算日：モモハモグリガ 7月24日、ナシヒメシンクイ 7月23日